

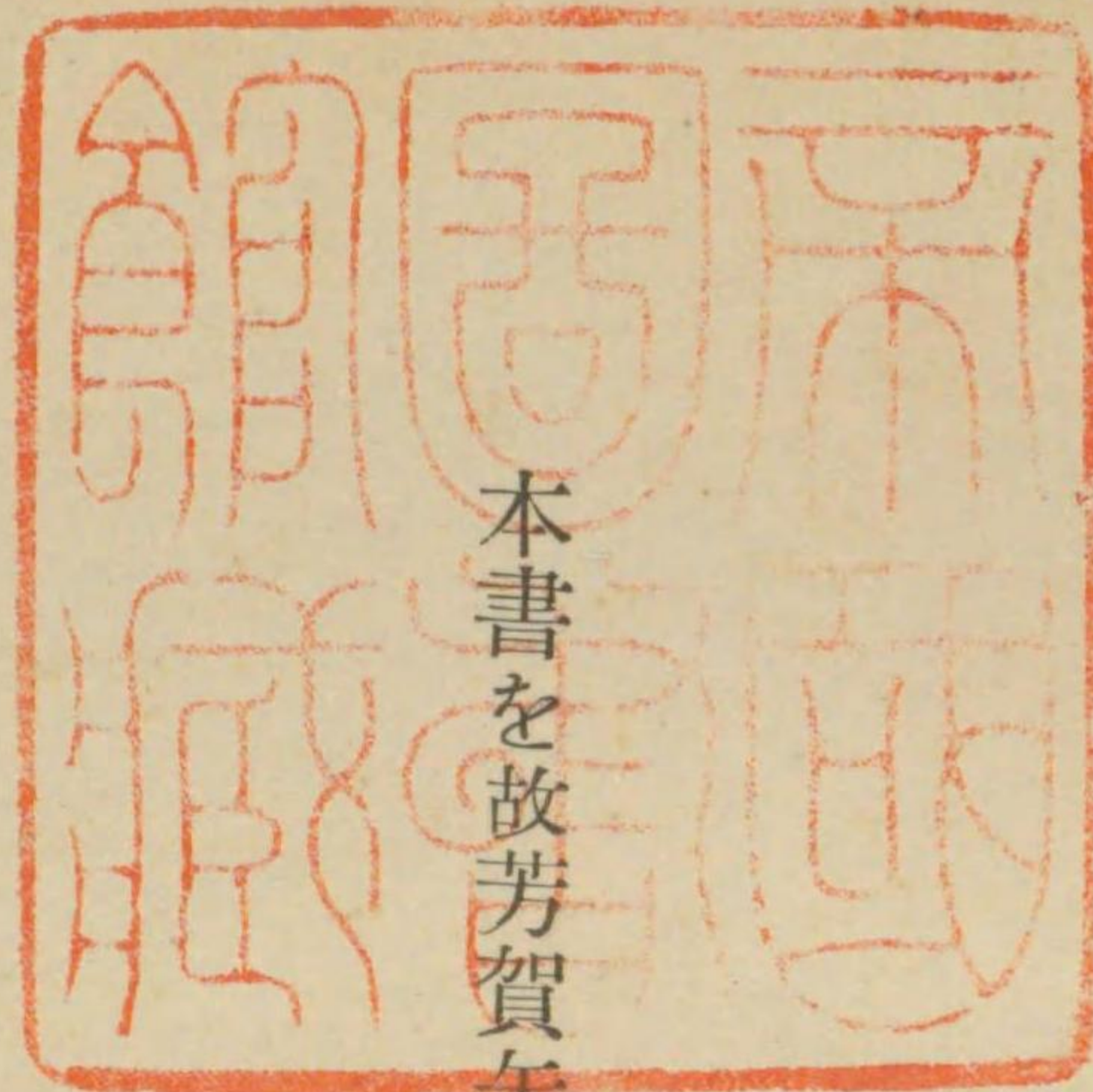
空の海

633-239
1200501542192

633
239

633-239



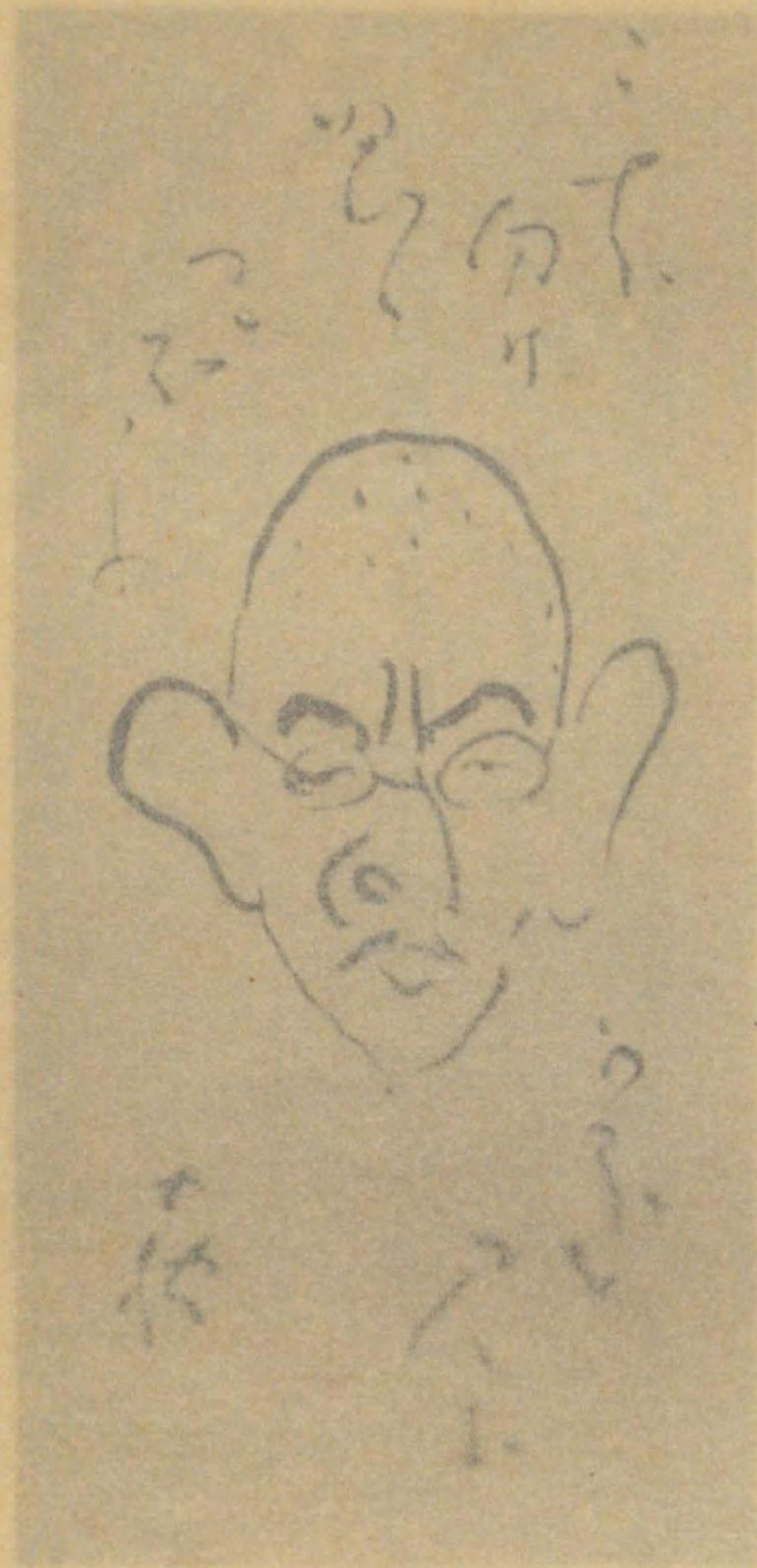


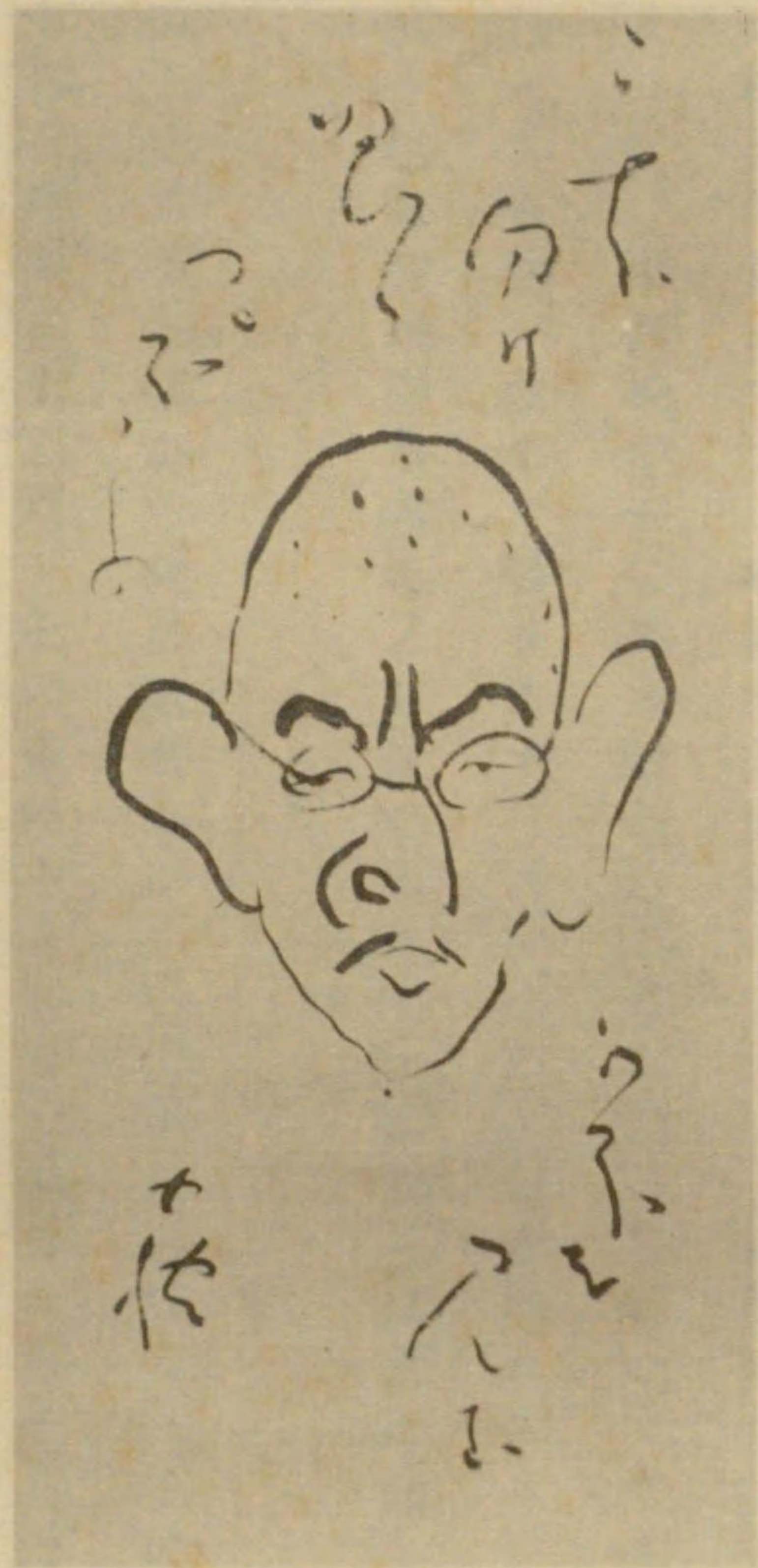
本書を故芳賀賀賀一先生の神前に捧ぐ

末弟

萩原蘿月







633-239

序

父は横濱の商人です。春秋庵の系統の人です。「横濱繁昌記」を書いた森田友昇の親友です。中學校の一二年生頃から、父母の郷里に歸つて來ると、夏の土用干などに、色々な書物が並んで居ります。子供心にその書物をあさつて居る内に、「七部集大鏡」や「芭蕉翁句解参考」などを見て居る内に、自然と俳書に親しむやうになりました。

明治三十六七年頃から、夏目漱石の紹介で、虚子や鳴雪の門下に馳せ参じまして、椿三十句を持参しました。その後、ほととぎすの句會に出席したけれど、一向選句もありませんでした。蘿月は句は下手であるといふ評判でした。併し私は専心

句作に努力しました。明治四十二三年頃しきりに「ほととぎす」に投書しました。連句雑考や俳體詩に努力しました。虚子や鼠骨の賞讃を得ました。その當時は十七音の舊傾向の句を作つて居りました。

明治四十四年に弘前の女學校に行きまして、空が眞紅に晴れてゐる中に、粉のやうな吹雪が吹いて居りますので、非常に刺戟を感じまして、句風が一變しました。友達と一緒に寺に寝たこともあります。朝起きて見ると、門前に雪が一杯積つて居ります。雪踏みといつて、むかうの人は一番早く雪を踏んだ後に、私達が道を拾つて歩くのです。三尺も距離がありますと、歩くのに随分骨が折れます。さういふ生活をしまして句が一變しました。

大正二年に俳諧研究會を組織しまして、高濱虚子、内藤鳴雪、沼波瓊音、坂本四方太

などの後援を得まして句會を起しました。その頃から又句風は一變しました。碧梧桐の新傾向の影響も大分ありました。併し俳句は感情生活が根柢であるといふことを自覺しまして、やゝ自分の句境が成立つたやうにも感じました。「冬木」といふ雑誌を創刊して、その主義の下に句作しました。同人も多く集りました。感激主義の「冬木」の句風は當時の俳壇の注目する所でありました。當時の私は相當覇氣もありました。周囲の俳人を罵倒し盡して意氣揚々としてゐました。眼中敵無し之感がありました。或人からは山犬とまで罵られたこともあります。實際山犬と罵られても仕方がありません。當時感激主義に共鳴する者はあまりありませんでした。大須賀乙字が俳壇の論客として鳴つて居りましたが、彼の句風は肉少く、私共の顧る所ではありませんでした。萩原井泉水も當時の俳論家

の一人として飛躍して居りましたが、都會情緒の散文化した旬風で、私共のあき足らぬ所でありました。舊傾向の遊俳人などは私共の頭にありません。併し「冬木」の運命は長くありませんでした。それは私が同人を統率する俗才がないと同時、あまりに藝術に純潔であつた爲に、たうとう大正六年六月坂本四方太の歿去と共に、廢刊の止むなきに至りました。それは後のことであります。

藝術生活の私は實生活に於て敗殘しまして、愈、埼玉落ちとなりました。平原の風を高唱してゐる友人もありますが、麥畠と桑畠の連続には私は厭きくしました。土手に登つて春の麗かな空を仰ぐ日もありません。子供を連れて田圃の芹を摘みに行つたこともあります。或大きなお寺に泊つて、松風の颯々たる音を恫しく感じたこともありました。ローマンチズムな空氣は此處に花が咲いて、私

は親友増田白花と親しむやうになりました。白花は私の落莫な生活を十分に慰めてくれました。それと同時に私の遊蕩生活も始まりました。みんなと「しだみ」の原で夕日を浴びながら、友人の戀人を待つて居つたこともあります。彼女は私に一葉の寫眞を托して、彼に贈つてくれといはれました。「しだみ」の原に夕日が沈んで、白い往來の砂がきらきらと光つて居ります。家の角に立つて私共をなつかしげにかへりみた女の後姿は今でも忘れられません。萬葉集に歌はれた東國の名所も、私共には空想的な懐かしい情景となりました。

埼玉で散々享樂の夢を見ました。かういふ男にも過去の追憶がありません。實生活は轉々として仙臺落ちとなりました。

松島の月先づ心に懸りてと芭蕉翁も言ひましたが、私の仙臺行はそんな風流な

旅ではありません。辯護士と高利貸の多い仙臺、土地を賣つて金にする仙臺風景も、新來の私には非常に珍しく感じました。「つつじが岡」は練兵場になつて居ります。玉田横野は溝川があつて、櫻を散らす風がつめたく吹いて居ります。私の家は廣瀬川の附近にあつて、秋になると霧が一面に座敷に吹き込んで來ます。霧の音がかすかな明方の空氣をふるはして、庭先の多羅葉樹の葉に雫を宿します。

霧の中にねむき眼を開く

といふ句が、私のこれまでの句境を變つた方面に導きました。勿論この句は平凡な句です。併し私の俳句進展の上から言ひますと劃期的なものです。仙臺生活は五年續きましたが、妙な關係から校長排斥に加擔しまして、一味徒黨の教員と連袂辭職しました。その仲間は今はどうなつて居るかわかりません。

又東京に歸つて來ました。大成中學にしばらく教鞭をとつて居りましたが、そこも思はしからず、まごまごしてゐる内に、友人の世話で、明治學院の教師になりました。しばらく清教徒の氣持になつて務めてゐる内に、高等商業部の内田南艸君と知り合ひ、學院に俳句會を創立しました。啓蒙的な俳句をしばらく作つて居りましたが、面倒になつて、地金をあらはす頃には、三四十人の會員も散り／＼になつて、たつた二人になりました。その二人といふのは内田南艸君と大阪にゐる風神蒼白城君とであります。熱心な門下生です。その内田君から現在の俳句雜誌「唐檜葉」が生まれました。私は不思議な神の導で祝福を得ました。

俳句は感激が第一であります。生活表現と言ひましても、感激なき生活では意味をなしません。詩人の感激は俗人の感激とは違ひます。

清く高く内に燃ゆる所が詩人の尊嚴であります。私は此感激主義を「冬木」創刊以來高唱して居りました。詩は民族精神の發露と言ひましても、個人的に感情の流動がなければ駄目です。民族精神といふやうな概念的な考では句は出来ません。個人の直接な内部の要求を考へなければなりません。傳統精神を尊ぶことはよろしいけれど、詩人の感情を束縛するやうな無意味な傳統は捨てなければなりません。句の表現問題は感激の内部的な動搖によつて確定します。十七音の表現形式は單なる傳統ではありません。句切の約束は五七五といふ格律に必ずしも一致しません。感動の實質を標準にしなければいけません。季題尊重などは無意味なことでありませす。時代錯誤であります。そんな事に民族的傳統はありません。ただ個人をかへりみなさい。個人の胸熱き感情に問ひなさい。それ

が俳句創作の第一歩であつて最後であります。

新しい緑の島は目前に横はつて居ります。私共は飢と疲に萎えてこの楽しき天地を渴仰して居ります。そこに自由な野がひらかれて居ります。そこに香高き草が萌えて居ります。

若い純な空想に満ちた人々は、自己の生活の開拓を惜しみません。高く歌つて、強く働いて死ぬ、たとへばエスキモーが氷の上で火をかこんで、踊り狂うて、氷が割れて、海の中に落ちる、それでよいではありませんか。

この句集が出来たのはすべて内田南艸君、梶田三郎君、米倉勇美君の骨折であります。この人々の純な報恩的行爲には心から涙が流れます。私みたやうな名も無き路傍の草のやうな者に、かうした暖い風が吹いて來るかと思ふと、自然の恩寵

をつくづく感じます。

おそらくこの句集が最初のものであつて、最後のものでありませう。私の墓の記念樹はこれで出来ました。

昭和八年五月五日、五十年の誕生を迎へて

萩原蘿月

後序

君と始めて相見えたのは大正二年の秋であつた。君が埼玉中學の教師として赴任した翌日であつたやうに覺えてゐる。君の假寓を探すために私は案内役を勤めた。未知の二人は午後の葛西用水の堤を語りながら歩いた。其の時の君は紺の背廣服を着た若人であつた。君が蘿月であることは少しも知らなかつた。堤の芝草に横はつて語つてゐるうちに冬木の話が出て來たので、『君は蘿月君かと』尋ねたら『さうだと』答へたのが、君と今日まで二十年間の厚き交友を結ぶ最初であつた。其所には曼珠沙華が夕陽に燃えてゐた。野菊も咲いてゐた。出洲には千鳥が四五羽餌をあさつてゐた。當時の光景はその後別れてから逢ふ度毎

に話頭に出るのではつきりと記憶に存してゐるのである。

私は今でもさうだが、一人ぼつちの寂しい人間なので、その時始めて知己を得たかの感じがしたのであつた。私には今日に至るまで君より外に友達といふ友達はないのである。君もまたそれを能く知つてゐてくれる。だが二人の間では通信も一年に二三回、又僅か一時間ばかりで逢へる近距離にゐながら逢ふこともせいづく一二回にしか過ぎないが、いつ逢つても『やあ達者か』と極めて簡単な挨拶を交はすやうな全く打解けた仲である。眞に能く知り合つた間柄なのである。夏休になると君の子供が子のない小さな私の草庵へやつて来る。そして前の流や程遠からぬ荒川の流に親んで一週間位滞在するのが例になつてゐる。子供達も亦私の所と自分の家との區別がないやうな氣分に見受けられる程私共夫婦に

親んでゐる。私が君の小石川の家を訪れると眞先に子供達が駆け出して来て、小父さんと懐かしい聲で私を迎へてくれる。そして別れる時には長男の月男君が必ず辻町の停留所まで送つてくれるのである。私はいつも離れて行く電車のなかでひそかに臉を濡すのである。

偶々君が埼玉中學を辭して、仙臺の東華女學校へ轉じた翌夏、私は遙々と君を向山の霧の中に訪ねて行つた。相共に手をとつて高館の舊跡を弔つて、街道の松並木に義經主従が落ちのびて來た姿を想像し、又松島に遊んで、料亭で一夜を飲みくづれた。或時は三河の海岸に一夏を共に暮したこともあつた。今でも逢ひさへすれば互に酌み交して興の盡きることを知らぬのである。

斯うした仲の君が、五月五日の誕生日に句集を出すことになつたから、私に序文

を書けと單文ではあるが極めて感激に満ちた端書を寄せて來た。私がそれを見たのは四月十九日で、伊勢路の旅から歸つた夜であつた。私は老妻が差出した端書を読むとすぐに書くと言つて獨語した。君の句集の出ることは私にとつても亦この上もない悦ばしい事柄である。

君は稀に見る人格者である。それは常道の意味に於ける人格者といふのではなくして、全く生れながらにして持つて來た天分に富んだ詩人であるといふのである。もつと明瞭に言ふならば、君は原始的の靈の持主である。温みを多分に持つてゐる野人なのである。君の瞳はその象徴である。君の言行の素朴はその發露である。君の俳句は春曉の露に生れる松露のそれであり、又松柏を吹き倒す野分のそれである。

君は妻君に二人も死なれ、十人の家族を抱へて、而も貧苦の間に處して洵に超然たるものである。それは決して俳人にありがちの衒氣ではなく、生れて持つた素質の然らしむる處である。私は又以て尊い極みと言ふを憚らぬのである。若し君を評するに修養の人と言ふ者がありとすれば、それは誤解も亦甚しいものと言はなければならぬ。君は若い時と五十歳になつた今日とで恐らく心境に大なる變化を來たしてゐないものと私は信ずるものである。所謂最終まで童心を失はない人なのである。君は決してえせ風流人でもなければ、又賣文者肌の詩人でもない。君は詩作を業とする程巧者の人ではないのである。従つて君の句はその表現その技巧が、その線その風格に於て、太くして簡素である。故に絢爛目を奪ふやうのものではなくして、含蓄して始めて甘味を覺ゆる自然味を多量に含ん

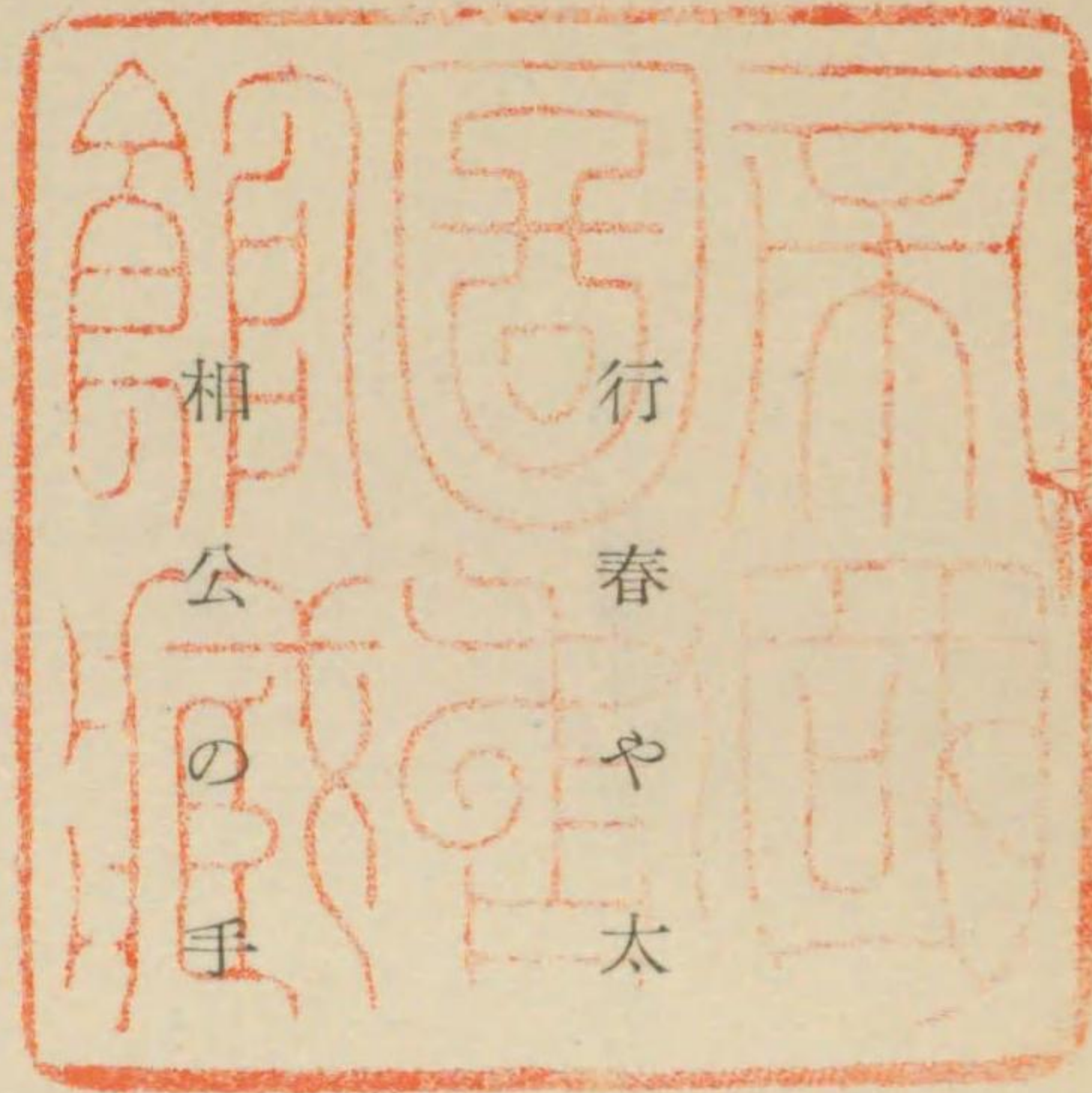
だ野頼である。私は野頼の香氣に憧れを持つものであり、又それ以外に甘味を知らぬ野人である。私はこの意味に於て君の句集を讚美する一人である。嗚呼我親しき友相互に老いた。春秋餘すところ幾何か。一筋に日暮まで歌ふではないか。

昭和八年四月二十日夜

鎌塚の草庵に於て

白花老生

明治時代



行春
刀鞘
中にあつて泣く
や太
を
う
ち
な
ら
す
晝
寐
起

菓子食うて茶屋を立出る木こ下した闇やみ

椎の木のさしかけ茶屋や羽蟻とぶ

日盛や繪皿に藍の干びたる

蟬鳴くや花和尚寐ねし亭の屋根

稻妻や出し抜かれたる兵船

稻妻をかけ抜く船や八挺櫓

秋風やぶよの喧嘩を見にごされ

口ハ臺の三人去つて落葉かな

風あらしき或夜ひそかに蛇穴に

門番に一棒喰ひぬうかれ猫

我宿は都のたつみ猫の戀

絲によるものならなくの夏負や

したゝかに糞踏付けし野菊哉

折々は蓼の蛇打つ棒の折

燈籠の消えがてに香のつきがてに

佗しらに菊なつかしみ植ゑにけり

日の落ちて紅つくすもみぢ哉

井のほとり南天の實のこぼれ落つ

冬川や蜜柑の皮の流れ寄る

亡き人の燈籠廻り消えにけり

蟬鳴いて夜の驚や風涼し

喝々と棒ふる人や月の露

—明治三十八年—

砂 植 の 紫 堇 咲 く 小 さ 々

花 咲 く や 二 代 高 尾 の 出 る 尊

煬 帝 の 夢 濃 や か に 牡 丹 お つ

夏 菊 は 伸 び て 水 仙 の 見 え 隠 れ

蟬 鳴 く や 油 ぎ つ た る 溜 水

撫 子 や 乾 き き つ た る 野 の く ぼ み

新 愁 の 撫 子 の 朝 や 露 の 思 ひ

稚良子の皇子御即位をいなみ申しければ

御 心 は 氷 を ゆ づ り 解 か し け り

戒名もなく露草の徑かな

京傳の讀本よりぞ冬籠る

池近き菊の古葉や氷りけり

大兵のむづと氷に坐りけり

この後墓ありぬべし芒生ふ

やゝ寒し芒の徑みちに入りぬべく

—明治三十九年—

妻茂子の死二句

傷心のなほざりに見るや桔梗など

産熱に敢て秋草を遠ざくる

—明治四十三年—

弘前吟十一句

町も野も押埋む雪や岩木晴

山門へ逢著す雪ぶみもせり

杉の奥にちぢまる雪の門と見し

友とあれど冷やかな契雪おろす

大寺に寝て雪下す音しきり

氣昂れば吹雪く日赤き雲の見ゆ

霜風に菊干す寺の荒畑

南瓜下す村縦横の冬構

椽高う山見晴さるゝ冬構

菊つみに枝下し置くも冬構

笛女病氣見舞

短夜や鼠に足をひかれ給ふ

大
正
時
代

雁名残窓前の山壁立す

更衣終日人と相見えす

市紛の氣いとはしやこの更衣

この道より古人北せず草茂る

魚買ひに夏野藪下より出づる

露鳴りもこの頃聞かず茂る木よ

友と別れて

めぐり逢はむ日も今日のごと草茂れ

雪圍山も仰かず籠り居る

西をのみ雪圍ふ寺に籠り居る

牧の奥の大寺に冬籠る旅

藁蒲團調へば冬籠るなり

御山開言ひたてつ絶えず蠅拂ふ

谷向ふ越後領蠅群るゝ宿

藩祖の碑冷々と蠅蝶の飛ぶ

姫塚と一廓す蠅冷々と

晝顔の河原山々雪を見る

火山岩晝顔白く這ひかゝる

蠅追へば又の海鳴り雨やらむ

日焼け雲いつも山裾蟬しきり

畑中に霧浮み居り天そら炎ゆる

三角岩港を封じ天炎ゆる

風除けの並木砂白天炎ゆる

丸う低う禿山つづき天炎ゆる

砂崩れ谷とどろかし天炎ゆる

風強き炎天雪の谷に出づ

穴蜂を草にふむ谷天炎ゆる

漂泊の冬よりとまり螢見る

この地来て紫陽花を見ず飛ぶ螢

人そしるその御口に枇杷の核

淮亭の寓居を訪ふ

桔梗ダリア庵住みなれし體たらく

霧こむる河原流木を焼く臭ひ

湯上りにつれづれに柿出し食ふ

鮭洗ふ流の上^{かみ}は柿林

芒塚むらむらと廣野柿村へ

峠越せばなほ沼風の強き柿

川々に與ふ

初冬の銀杏と申せ君がほ旬

干草に霧めらくくと乾く朝

瓦斯のよな霧こもる寺の大芝生

木立切らば住みよけむ秋の水出でむ

海手より二里來しと思ふ稻の出來

砂明りめぐるほしくも鹿を見ず

寺に寝て一句

金屏に後を圍ふ露けくて

廣前のあまり清らに露けくて

大木なき芝生見守る露けくて

磧向ふの芒塚より來し蜻蛉

山の姿かたくななれば群る蜻蛉

芭蕉忌二句

夜寒むの灯とどかぬ君が像を見て

底深き闇の寒さに君を見て

鹿を見ぬ地荒ぶれど山壯なり

水筋みすぢしるく寄る水鳥みとり空かつと晴れ

よごれ雪に地の微と見る水鳥が

菊あへの後食ふ餅の大切りに

森黒む晴れやかさにも白菊が

地酒温めおほろかに菊みつめ居り

監獄の裏門ヒソと水鳥が

水鳥アカシヤ吹雪く岩山を眞ニ向ふ

草ふくむ小鳥羽振ふ風に

忘る事の願はしう冬に籠り居る

籠る其日を入りけむ冬の旅と見む

ほこり動く日向の菊のかつとして

菊の根に藁たまり居り暖かく
才藏を連れぬ萬歳大股に

—大正二年—

掃く煤を藪際に焼き春待たん

荒海にひたと沿ふ野にやかくも枯れし

川上に住まはずば野も枯れざらめ

煙突の雪小鳥が食みに来て

日一杯さす部屋にゐて春待てど

酒臭き舊友に逢ひしより春が

カナメ垣の下は盛り土黄水仙

海見やるに何のたのしみ藪入が

細^{さい}枝^{えだ}しげき大樹の下に牙返る

脂付きし妻^めがいとほるゝ東風吹いて

暗き隅に怖ぢし稚き東風が来て

照りかげり早き窓東風が天ぎらむ



遊び砂落とす鳥そこら轉に

舊臘川出兄の所に例の三人鼎座

一年の罵りじまひ君がとこ

小さき穴より見るもの強ふる春淺き

額代へしも似付かぬ廣さ餘寒ゐて

汐近く来て初雷のほのかなり

田水動くのみ初雷の訝ゆれ

日の出仰ぐ岩浮かす水温うして

椽下風冷やと吹く奥が日永くて

藍流す海を見るのみ日永くて

しのぶの結婚祝

照葉駒鳥囀る家居妹にあかず

妻を失ひし川々に

梅淋しきに嬉しきに汝とあらんもの

森の奥より初雷が冷を誘ひぬ

ここだ月日灯見ぬ水面ぬくもり來

春透く藪柑子拾ひに草分けて

晝一時内ヒソと仰ぐ歸雁なる

丘の家をなつかしみ來し枯野ぞも

柚の住居崖下に枯野果てと見ゆ

木目あざやかな床に水仙投挿しに

池の跡が水仙に埃埃る眞土にて

東風たまる汐寄せ風のうるし闇

大雪解の滑らかす木肌光り居て

そがひ間風沁む明るさに春淺き

汐境赤らみ水も温み來る

栗の澁が泡凝らす土筆莖太に

露歩子と一夜しめやかに語りて

君に逢ひしも堇時僧の子と思ふ

鴨場作る雑木交りに菜の花が

木肌ぬらす雫に籬静れる

重き空をさゝふる水蒿温み來て

勞れし時も枯棕栢は柔毛桃の中に

鐘沈めし藪下と思ひ來しに蛙

蛙穴べ砂落とし遊ぶ友を強ひて

川々居にて四句

椎の奥の灯を守りて語る春夜なる

ニツ青き灯が椿守る我方へ

茂に忘れ燕のみ飛ぶ畑にあたり

森の中にゴ、と寄す音春惜めば

葉照り移れど藁切る風の春名残に

追鳥の霏下りばつゝじ煤浮いて

つゝじ根へ茶殻捨つ泊客も見ゆ

瓦埃吸ふつゝじ餅の巻葉して

飢う眼据はる濃きつゝじ若芽咲ぐ日あり

冷めし茶汲む老のまたたく若葉濃き

雪解花もひとときに畑打そめて

竹の根が土起す湿地なれば土筆

明けば羽目の若葉槻に茶をかくる

下り難場のこれより鮎の水郷に

居残り坊は醜しづ女めにそへとさみだるゝ

泊廓とざれて早立ちしさみだるゝ

ふと怒れば梅雨じみし衣の紺の香が

よぎる人等まじろまぬ禿げし夏山に

佛壇に樹の緑うつる霜も去にし

竈場くゞれば状さま變る夏の峯もあり

草かむ犬も芝生より起きし春霜に

埃虵にあへぎ來し茶店鮎焼きて

瀬變り鮎の山深く入りし暑きかな

一人念佛に衰へし家もさみだるゝ

なほ若葉の反そり木は畦うらに埋れ居り

涼しなぶる蟲の粉を瘦せし手の上に

日ざし追はぬ猫を夏草に見てつかる

小鳥するどうひらめく茂家新たに

入日強き一日の沐浴百合風に

杉材干かす寺前に終る涼しくて

水浴びて来て百合も嗅ぐ發ち際に

煤煙が檜葉の夕立つて冷やかなる風に

風の息さい茨かちを夕立に起きし竹の奥に

裂いてはもやす紙にもつかれ葉柳を

草にも鳥の逆落つる椋の夕立つて

底を濁せば別れともならん蝸に

ふたうねの芋に焼地よりほこり来て

草抜いて忘れ居る芋も二たうねに

遠ざかる闇の灯の海に蝸が

不嘯子出征

灰に塗るる啞蟬を放し戦へ

草投げては別るとも見えず蝸に

風に消ゆる星の廣野とも蜩に

竹梅を訪ふ十五句

家鴨追うてのぼればやせし君に逢ふ

君が齡雁啼けば早も灯しそめ

冷かな砂掃いて如何に待ちわびし

一日何も賣らねば萩の枝分けむ

顔淋しき灯の露けさや稻うれぬ

寐ながらにねぎらふ慟も釣る友よ

慟つりくるるを酔うて見る翌はいづ方へ

萩も思はず箕吹く娘や去ねばやすらかに

娘にざれつ我を送る友と柿食はめ

あす別るに兒等馴れて鶏頭散らしゐる

稻田中の盛砂の家より道岐れ

砂冷たき雞は菊の根もぐりゐる

離別

餅祝はれ一杯の酒も飲み残し

稲の穂波に來し方も忘れ鵬の疾き

黍の暗き寺裏にたまか百舌鳥啼いて

窓へ芒の穂吹くやみ濃き賑やかさ

冬田浪音どよめきも宵一時に

冬の海鳴海にもきかずどよめきが

冬田も海の焼雲を映し丘ぎはに

なほ明るき冬海へ海へ草枯るる

蛇の落とす殻蟲を水に初冬が

槇の外より罵らる萩の鶏待つて

枯草に寄る泡や岬黄にそみて

鐵花病むと聞き言ふべき言葉を知らず

青く揺るるる灯に菊に目ざしそらしゐる

群集過ごして哀れがる影の凍てゝあり

木白埋もる屋かげりも濃き風す

刈草さぼす風に水泡寄りもせず

かげりふゆる風や茜雲見えて

友の避寒を送りて

そめし貝多き淡雪の旅幸を

病む子の衣きぬの紅べにもあざやか淡雪に

葉艶荒きねばり木の一芽隠るるよ

草の一芽も春日に洩るる土ふるうて

裸桐の一冬はひやゝ藪を背に

いち遅き柚の黄も餘寒風晴れに

黄一輪の水仙に産屋荒じき

漣月より柑子を贈らる三句

子の寐息静まらば柑子又嗅がむ

煤なめて香強ふ柑子うれしきに

みとこに灯ともしし賑やかに酔へば柑子黄に

縮つみても春待てば待たるかかり人

フナ卸しあれば風溜り寒き旭に

重し吹ぶき草に落ちて安すけれ寒照りが

蹴上げ砂と知れば寒む芝生拂はれて

雪や汐に沁み來ぬ泊落くと

廓を出づ七句

笹やぬるるみぞれの廓七草に

水づく冬田のなべての光萱の一つ芽

茜初めし海の眞光り萱の芽に

今し海を離るる旭萱芽さざめける

萱芽くくのほぐるる旭田水一杯に

空の瑠璃は念々に萱の一つ芽に

萱芽に見とれ廓の別れそこくに

汐乗り東風に變る轉り切れくに

ねむり欲しき草まぶしくも蛙強よ

まれに檜葉の一雫蛙かやくと

雪解またく了へし花片の淡々と

汀砂の光る水勢花満ちては

松は波のしぶきにぬるる花満ちて

草芽くの露じみし柳萌えそめぬ

鴨流しては柳の芽缺く忘れえぬ

蜘蛛の子のかたまつて死ぬ午を酒

西浦に遊ぶ十二句

波そめし陽のうすれ行く小萩の戦ぎ

いただきの砂は小萩の本に荒くたまりぬ

砂の音のかそけくも消えぬ萩の根に

小萩小松も碧き空仰ぐか子この墓も

眠る海より旭はいち早く朝顔に

明けて減く汐のほのかに蟲は夜すがら

月代淡き海は静に汐のこごりに

汐のこごり見るとなくいらへもの憂き

露の柚子の淋しく匂ふ汐もふくれぬ

やつれし面に刈草の露こぼし行く娘よ

石の萩は一日も露の干ずありき

海越え來し旅人に變り朝顔を

春樹朗居にて四句

啞蟬とだえぬ峽の内の暗きに

啞蟬は梢に午の田水溢れて

稻田の光うすれ見ゆ木蔭の木槿

木槿折りつゝ原をも越しぬ見飽きし

夢三の椋六句

よろこびの朝鳥は椋に一齊に

椋へ落着く露けき鳥の晴れくと

くらくらと陽はめぐる椋の後に

小鳥はなべて椋の陽を待ちざうめきぬ



一日の永き陽のめぐりそむ椋の上に



やみは椋の占めし地に入り安らかに

仙臺吟二十三句

陽にくらみて雪深く深くふむ

夜の空たのしや雪にぬれ來ぬ

唄聞く日は曇りてわが生さびし

霧の中にねむき眼をひらく

原中にて重なる悲しき雲

草に寐て體を小さく感じぬ

摘み來し花にもあきぬ野のかゞやき

たのしみに蟲を殺す野のかゞやき

花に遠ざかる野には風も立つなれ

わづかな兒等の騒に鈴賣の來る

燒草を見にはるく野を横ぎる

ぼうとして坐りぬ枯野

砂地の草青みつゝ別の日となり

松のさび枯れ家まはり乾き

敷布洗ふ日なればうすぐもるなり

敷布洗ふ雪は日かげくにかたまり

松の葉落つるまひるの泥雪

暑き日はがるゝ蟹の甲

枯 笹 鳴 る 水 仙 の 太 き 芽 生

ど ろ く の 陽 と な り し 今日 の つ か れ

生 笹 の 魚 の 血 流 に ひ た し

ふ ん ど し 洗 ふ 明^あ日^すか ら 學 校 だ

雪 か く 人 の 中 に つ か れ て か へ る

小 草 は 戦 が す そ れ ぞ れ に 影 持 つ

ヒ バ の 下 や み ね む れ ど も ね む れ ず

蘭 の 蔓 落 付 く 土 を

竹梅居にて十六句

麥の
中の一
つ松御祖の地

乙女よ
こち向
くな沈
むく陽

萩の下
にたま
れく七
夕色紙

稻のみ
のり日
出づる
方日入
る方

落日草
冷たし
草握ら
む

足音ひ
そまり
尊しや
落日

畦二道
に岐れ
ば戻り
ぬ

陽の落
ち方地
の火は
あがる
れ

ひととこに燃ゆる稲田の火

草束に火を願ち行く人聲のみ

蠟燭の灯に蚊帳出でゝ語りし

蠟燭ともしみ三人の旅のかたらし

かるき砂足もとにさゝやく

山のうき雲見れどもく去らず

一夜竹はやも落葉

芒戦がぬ長きく日の元日

弘前へ遊ぶ八句

合歡のみのり待つ旅人とも知らず

枯木の前に立ちとまる地はひでるに

炎ゆる地にむしられし花片の光

盥の水はすめどもひでれり

黄な花びら日陰の水たまりに

あつき地に花びらの光かゞやく

冷たき水に紅き花片のきれく

合歡の花家根より掃く早

黄^つ揚^けの上葉つぶらに光りあわただしや

—大正五年—

つね女の結婚を祝ふ
おぼろなる海鳴り聞かな
明^あ日^すよりは

鏡見じとす夜の琴並みたれ
めざめし雪かゞみに顔
琴のちり浮く雪とけたり

眞木あけし音ストープはなるる

爐火うつる春の夜の鏡に

妻子出てゆくくらがりに飲めば

春日の一條盃のおりな浮かせそ

嫁ぐ子に
汐ぬるうさやぐ日ひと日ひく
に

竹梅出産三句

女 児 生 ま る 冬 の 天 地 一 色

母 と 子 お ご そ か な 光 の 前 に

空 も 人 も 春 待 つ 日 ざ し そ め た り

香取にて正月

夜 廻 り に 妻 を や り 二 日 と な れ り

雲 な き 一 時 の 空 芽 は 伸 び た り

空 見 る 目 さ き に さ ま く な 蠅 の と び 來 る

日 は 照 り や ま じ 茂 の 枯 葉 よ

葉 裏 見 す る 夕 に 落 着 き 行 か む

我寂しき日妻ははたらきはたらく

—大正七年—

泥雪かたまる葉表の煤

くもる日雪は日かげくにかたまり

我方より行く人なし朝の青空

日向より萌ゆる草なり悲し

草萌ゆる地の果ての空くつきり

千鳥聞いて別れしその夜の産聲

蟲落つる夜の顔つかれてあらめ

あたたかき夜の小蟲落ちては死ぬ

風雲を見る道の石あらはなり

雨の音やみすべての物音やみし

白花の牧の臺にて四句

青空となり水際の蟲のゆくへ

いてふを見よかゞやける十方世界

公孫樹は日を東西に分ちて立てり

芋の葉食くらふ蟲けらわれら

一日働き夜の静けさになれたり

木蔭に入る秋の空の深き色かな

話つき日ぐれを待ちおろくと起ち行くかな

子供來り鶏頭を揺らし陽を散らし

ひる寝さめてヒバの葉の泥をおとす

冬の日もゆ厨にあそぶ妻と子

湯あがり夜の菊を膳まに持てくる

菊の水かふ夜に入りて歸り來り

障子の日消ぬれば透し、梢を仰く

冬の落日ひととき子等ひとときに出てゆく

あこの聲かすかになり落日ひととき狂へり

ヒバ刈り透し今日といふなごめる冬

火をかき起しつ今日の終りの夜ぞ待たる

仙臺出立前

冬空に似て日をかくすいかに長き

二枚の餅重たく貰うてかへる

初空や枯草のつるを引きたぐる

初空のまたき陽に一日終り

水仙の香わが春のひと夜ふた夜よ

伯母の渡米を送る八句

船首に群がる一だんの人等ひそまり

はろかなる藍の海空ともはなれず

別れ来て冬枯の公園を見歩く

ここは冬の用なき日向の人々のみ

別れ来て冬日の色になれてはつかる

見送りに来てをさなき日の松は残り

別れ来て故郷の町をきゝきゝゆく

わが郷さとの船出かや見送り見返り

徳山に遊ぶ

京を戀ふ冬の旅なれし夜こそ來れ

かき舟見ゆとふ旅なれそめたり

月男病む二句

父を見る冷たき眼かな酔ひたり

起き上がるあこの眼のまどかさ

木々の下草あたりの陽をあつめてしづまり

枯れつくすなべてのもの短き影濃き

揺れ止まずしてかけりく笹の若芽

あたたかさ足につく厨の砂

やむ子やわづかな芽生へを見出し

花咲き満ちてまつたき靄

水仙の芽乾ける泥を起し

山吹の花白ぼけて子の咳つものり

西浦へ行く十句

たち際のねむの花散りかゝれり

子等去つて萩の風顔にあたる

木の葉白ぼけ海の陽閃めく

柚子明るく海に入る陽の一すぢ

乾き切る午の蟲がらを掃く

土をほり海に入る兄弟はらの黙々たり

陽は動きぬ木を割れ木を挽け

海よりあがり今日の終の陽を思ふ

海の子の強きはたらきわがさびしみ

井はにごり井は草に囲まれたり

芳賀先生を輕井澤に訪ふ二句

いらへおそきわれ等が霧のはなし

老のかほ霧にめつぶり居り

苗床うつす垣際の二三尺

夕ひととき時わが顔にめぐりくる冬木の陽

丘蘿草來る

師走のわれら遊び歩く宵々つづき

夜の人となる机の上の輕き埃

雪大いにふる

雪の原に入り後は夕焼ひろがる

師走の日暮を過ぐればはやも入る

枯草を見ては後の足音を氣遣ふ

夕焼ひろがりくらき足下の枯草

霜草枯れ伏すひぐれの人出

句はあつたけれども皆忘れて了つた。何でも竹梅や川々等と回覽誌「冬木から」を出してゐたその中に入れたものもだいぶあつたかと思ふ。その「冬木から」も黎明とのいさかひから止めとなり、それも亦手許に一冊もないから今はわからなくなつた。

—大正十一年—

句作にうとく殆んど作らないと言つてもよい位である。併し大地震後最近十句ばかり作つて友人に送つたけれど句は忘れてしまつた。

—大正十二年—

はじめて白秋を小田原に訪ふ九句

やみをぬけたら月が出た君の家だ

星が見える君の家の前のあかるみ

家まはりめぐりくつきせぬ思ぞ

をどれをどれ若草に風來れり

海の波立ちをどりはじまり

をどりつかれて足もとの草のかげ

陽は沈み海風立ち犬は起き行く

若草ゆらぐ犬のゐねむり

草あかるき野原の人すこやか

鉢を起しにふとんをぬけ出る

八つ手を見てると砂が縁に吹つかける

寝巻洗ふ四十となり病みほけ

砂が落ちる朝のねどこをふるふ

火鉢の灰が立つ病む顔に

病みこやる父ばかり五月人形

江ノ島にて八句

齒朶に陽見ゆ盃とく持て

あらしを待つ盃に酒をみたし

あらしの海明けてだぶくな汐ふくれり

雨雲動き横波の大うねり

一人残りこの海荒れ島もあれ

山の上まさをし荒れをさまり

山際くつきり朝の子等放たれたり

引汐の西に風強し蠅を見つけ

陽はめぐり草を焼く煙も消え

杉林もぬかるみ人々野へ出づ

稲貧しや草を焼き冬のまうけ

芒戦ぐ日蔭へ歸り行くなり

窓下の芒の中の人と見合はす

青空の八ツ手の葉すぢも見えす

たま〜八ツ手は冷たき秋風起し

わが後に櫛の夕日はゆるぎ

夕ひと時ときわれはあかるく照さる

ねむりにあき日向に出で衣洗ふ

病む今日しも天地あめつちの秋晴れたり

秋晴の今日しも暮れねむりを強ふ

覺めて見る秋晴の菊の光

妻愛子の死後七句

母に似た女の子の顔白ぼけ

母なき三人みたりの子の土いぢり

父をめぐりつかれて寝る女の子

こほろぎ捕る子一人かけ二人かけ

ソヨ子に代りて

こほろぎ出る髭立てる

すゞ風あこのちんぼこかるげ

父をめぐり裸のやせんぼみたり

八ツ手の下で涼しい風を待つてる

花火もやすーしきりの風を待ち

風の出る頃月を見て戸をしめる

瓦乾く八ツ手の葉のひろがり

八ツ手がやく櫛の葉枯れて落つ

地のほてりからくな櫛の落葉

石原純氏に招かれて保田に遊ぶ七句

枇杷山の枇杷のをぢさ酒飲まそ

枇杷食ひあきくぼ地に下りてかたまる

冷酒寂しや地のしめり覚え

風吹き來り冷酒の冷たく覺ゆ

海見ゆる枇杷山のわづかな平地

賑やかな人々の冷酒寂し

峯は風立ち別れ急がれ

花火あがる日曜の日向ぼつこ

日短き萩の葉の蔭を持ち

紫陽花太る短かく明るい日ざし

短き日の桐の葉落ちたまれり

やどり木風に吹かれ日短かき

—大正十三年—

葉先が光つて小蟲には飛びよい

つゝじのあかるみを見て天井仰ぎ

つゝじがかげつて来て話とぎれ

日蔭のひくい木を見て話しつゞけ

日蔭が多くなつた小鳥の聲

陽のうすれる庭の槌音が氣になる

暮れて陽のさすたまり水の動き

石の水が動いて紫陽花眼につく

夕陽に小蟲が落込んで来て消える

暮れかゝつてギボシの荒い葉艶づや

白い小蜘蛛が下る陽のひとゆれ

水のゆれ水際に残り灯ともしを待つ

晝の大銀杏で行人とだえ

珠數屋の灯が一つ残つて露のやみ

熊笹に風立つて蜻蛉つかまへる

百合がうつむいて咲く耳のかゆさ

寐て寐付かれず花粉を吹く

花粉がつくケツトの冷たさ

火鉢に伏せ置く二枚の夏ぶとん

葉を缺く音の面白さ晝寐起き

はめのしみが汚れて桐のかぶさる

夜を待つ桐の葉先きのふるへ

炭火が起きた柳の葉すれを聞かう

炭火を起し松風を聞き生きつゝあり

松の下地掃いて淋しくすな

かげり早き冬の縁先に立つてる

雨雲加はり八ツ手の葉重りをり

青木を移すくもり日の子の唄よ

凧をぬらしてくる子の分らぬ唄

移しかへて椿の根の米つぶ

子の唄やまりいよ／＼夜が来た

子供のあくび冬の夜が来たぞ

寐てうたふ女の子の夜の世界

風の日晴れ蜜柑の葉まきあがれり

入學日のあたたかさ子の食ひ荒らし

食ひ荒らしして立つ子の入學祝

子供すこやか父の酒もゆたか

祝ひつくしあたたかな夜が来た

母の死二句

酔うて語り酔うて語れば人散り散り

ひとりぽつち山に着く頃の酒の勢ひ

病む友の南瓜の花今をさかり

一面の南瓜の花陽のくくらみ

晴れあがる風をいとひはらからふたり

病起き草花を石でかこふ

病起き若竹の下の風

無果花の根の落葉乾きに乾く

湯上り夜の菊を膳にもてくる

炭火をかき起しつ今日の終の夜ぞ待たる

寐あきた花ぐもりの午後ひつそり

夜の人となる机の上のかるきほこり

冬の日もゆ厨に遊ぶ妻と子

あたたかさ足につく厨の砂

夜の花おしろいの花ほのかに匂ふ

富士を見、狂喜して作る

行手の富士青空せばまり

富士見ゆる道はますぐに凍てつき

鹽茶飲む水仙の葉先赤らみ

五月人形

五月人形すすぽけて妻の晝寐

まま子となり人形忘れ

母が来て人形は飾つたまゝ

乳をせがむ病室の人形倒れ

五月も雨となりしすゝけ人形

—大正十四年—

家が近いのに眞紅なをかしな陽だ

炭を切つたよ午後ひから寝るとしよう

芳賀先生病氣見舞

先生に逢つて来て道が歩きにくい

午後ひから飲む癖がついて淋しい

馬肉によばれた湯に入つて来よう

拂も出来ない隣近所の夜ふかし

鳴雪先生を悼む

二十年の弟子だ二月も終つた

昭和時代

露の浅茅の萩の枝起しあへず

萩の葉乾く西風の海手より

若葉の徑を抜けたがつて夕の一人

粥を煮る家まはりの木も枯れく

—昭和三年—

桐の寂しさ子供にまじる女

桐の寂しさ大人が子供にまじる

暮れかかつて陽のさすよ桐の戦ぎ

今日の米がない木影が濃いぞ

夕空あからみ白い桐の肌かな

桐の葉艶消ぬれば夕かそけし

灯のとどく桐の肌雨に黒みぬ

燕とくひらめくよ雑草茂り

楓茂りて葉先のふるへかそけし

枯れあがる菊の葉や夜のあたゝか

菊の葉さび見よ大地は乾けり

小菊亂れて松のみどりいよゝ濃けれ

水に羽する蜻蛉のかけ小菊は伸び

地のほてりやゝに静まり濃き豆菊

小菊豆菊草のつるが長いぞ

夕陽まぶしき草ふめば小菊のかけ

沼の落日柿を食ふ子集まり来る

沼風收まり菊の花ゆれてまぶし

菊や赤き土より風を起しぬ

森かげに来て冬空の風に濃き

菊赤き竹山よりの陽一すぢ

粃干すむしろの上雀の糞

椎の實拾ふ墓地に入りても拾ふ

芒の中へ沼近く西風に吹かれつゝ

北を閉ぢて竹山は清く掃かれし

笹の葉に夕まけし風の名残こそ

沼の落日カ家かげの桑ゆれにゆれぬ

森の上に風雲を見るよ芒より

―昭和四年―

京の酒になれく^レて死ぬ君やあはれ

遠藤清平の死を悼む 七句

北風の吹きどまり君の墓なれ

五六人日にあたり君の埋骨を見る

海よりのぼる陽はあれど墓は冷たき

わが上に照る陽はあり君をかくしぬ

今日のみ菊は匂ふなれ骨は冷たく

新墓の冬枯の風は後うしろの海より

神代村深大寺吟行七句

町をはなれ人見ねばやゝに風立ち

落花をふみ眞上の陽をうとみぬ

八ッ手は北に靜に夕を待つよ

五月の葉鳴り堅うなれば葉落つなり

陽はみなぎり葉先きの蟲葉を放さず

夕陽残る方より松風をきゝ分けぬ

陽にあき緑にあき花をたづねぬ

百草園吟行四句

森の中にわが墓あり畑打ちくらし

椎の上に夕の陽をあつめ來たれり

もみぢの陽を見た顔がほてつて來た

日かげの青草棕櫚の陽今し消えぬ

散りくとなりし柳の葉木かげの一ひら

顔に落つる柳の葉米をとぐ

柳の葉家ありて住みてもふるへり

今日の入日のなごやかさ蠅を見る

芽柳やごみ搔く人屋根にも立ち

楓のみどり明う見て羽蟻に當り

黒き蠅風の無花果の下より

とろゝすゝる父と子一人の子眠りぬ

夜冷えまさりて柿のつやいよよ明き

冬の夜菊あへの一人によろしも

雪かたまり座敷のほこりを掃く

子等の静けさ今年のはじめの雪

雪をやみし地の明るさに檜葉の影

大空ひらけ雪の上のほこりも見ゆ

氷をよろこぶ子草萌えそめし

焚火の灰冷たく落ち草に芽あり

枯芝に灰捨てゝ顔をそむける

冬木の中笹踏んで音の明るき